

谷崎潤一郎『少将滋幹の母』の鑑賞

中野 恵海

はしがき

谷崎の『少将滋幹の母』は昭和二十四年十一月十六日から翌二十五年二月九日まで「毎日新聞」（大阪・東京版共）に八十四回連載された。戦後の巨匠久々の大作ということであり、又この作が谷崎の新聞連載の最後の作品となった。本稿はこの作品からうかがえる谷崎の文学的特質の一つ、その美女憧憬ぶりを検討してゆきたいと思うものである。

一、美女追求

谷崎は第二次新思潮に『刺青』『麒麟』（明治四十三年）を発表したが逸早く「三田文学」の永井荷風の激賞を受けた。「三田文学」誌上（明治四十四年）に発表された『谷崎潤一郎氏の作品』がそれで、花々しい文壇登場への道が開かれた。この時の荷風の一文には谷崎の文学的特質として次の三つのが指摘された。

第一は、肉体的恐怖から生ずる神秘幽玄、第二は、全く都会的なる事で、第三は、文章の完全なる事であった。そしてこの『刺青』に見られる特徴は美とは、美しき女体であること、そして美しきものは常に強きものであること、さらには享樂とは美しきものに征服されることであることなどである。

これ等谷崎の初期の作風は一言に云えば、官能的女性美の探求にあり、嬌慢な悪魔的美女から虐たげられ、その前

に拝跪することゝ生の充足を見出すというマゾヒズムを基調とするもので、この面での代表作は例の『ジョージ』と『ナオミ』の物語、『痴人の愛』（大正十三年）であろう。ところが、関東大震災が契機となった関西移住以後彼の作風に変化が生じた。即ち対象の美女が、日本の古典的女性に転じ、『吉野葛』『盲目物語』（昭和六年）『芦刈』（昭和七年）『春琴抄』（昭和八年）が発表された。そしてこれらの作品に見られる、あらわすより隠すことの魅力は『陰翳礼讃』（昭和八年）に説かれている通りである。いま畧述した谷崎文学の本質に見られる、バタ臭い、西洋的悪魔的美女と、日本の伝統に立つ古典的美女への憧憬は、いずれもそのルーツは生母に対する思慕に発するものと思われる。日本近代作家に顕著に見られるマザーコンプレックスは谷崎に於ても殊にいちじるしい。その好個の例として筆者はこの『滋幹の母』を挙げたい。紙面の都合もあり今回はこの作品の一番最後の部分、四十年来会わなかったその生母に再会する場面を見てゆきたいと思う。

二、生母再会へのきざし

生母再会へのきざしはこの作の終りに近く、天慶六年三月に滋幹の異父弟、敦忠が死去したところから始まる。そして程なく生母は出家したのであったが、図らずもここに機会は廻って来た訳で、「もし滋幹が欲するならば、母に逢う道は容易に見出されたであろう」のに尚、「しばらくは決心しかねて、ためらっていたらしい様子が見える」という風に叙されている。如何にも谷崎好みの文章で、

——四十年来その人と隔絶しながら、おぼろげな記憶の中にある面影を理想的なものに作り上げて、それを胸奥に秘めて来た滋幹は、いつ迄も母を幼い折に見た姿のまゝで、思慕していたかったのであろう。

と、そのマザーコンプレックス振りを存分に描いている。

——さまざまな移り変りの末に世捨人となって仏に仕えている現在の母はどんな風になっているであろうか。滋幹の記憶する母は、二十一二歳の髪の長い頬の豊かな貴婦人であるのに、西坂本の庵室に隠栖する尼僧の母は、すでに六十歳を越した老嫗であることを思う時、滋幹の心は冷めたい現実の前に出ることを尻込みしなかつたであろうか。

と云う事で、彼にしてみれば永久に昔の面影を抱きしめて、さまざま回想をなつかしみつつ生きて行く方が、なじ幻滅の苦杯を嘗めさせられるより遙かに望ましいことのように思えたのではないかと作者谷崎の推量がかかっている。その滋幹が、

——ふと、急に心が惹かれるようになって、

横川の師の坊のもとのからの帰途西坂本への方向に足をむけたのである。そして季節は、

——春も弥生半ばで、

とあり、更に「滋幹が坂路にかかったのは、日がようよう西に傾きかけた頃で」とあるのは仲々重要であるが、それはやがて纏めて後述することにする。そして、

——いつしか空になまめかしいおぼろ月が輝き初めていた。
となる。

——滋幹は、黄昏の色が又一段と濃さを増して、水の面さえ見分けにくくなって来たのでここらあたりで引き返そうかと思ひながら、

やがて来て、

——ふと向うを見ると、湫川の岸の崖の上に、一本の大きな桜が周囲にただよう夕闇を弾き返すようにして、爛

漫と咲いているのであった。

と、山里に咲く一本の満開の桜が出て来るのである。ここまで読んで来て我々にはつきりと作者谷崎の意図が感じとられる。季節は「春」、そして時刻は「暮昏」、そしてそこに「夕月」と「満開の山桜」という風に並べてみると、これは、四十年ぶりの生母との再会の場所、その舞台装置に払われた谷崎の配慮ではないかと。此の夕桜については、

——何か魔物めいた妖麗さが附き纏っているように思えて、
と自らの説明がある。ここは「花の上の空にかかった月が、光を増して来て、弥生のもろしくうつすらと曇って朧々と霞んだ月が花の雲を透して照っている」、その夕桜のほの匂う谷あいの一郭が、幻じみた光線の中にあるのであった。」とあるように、ここは、

——幻燈の絵のように、何か現実ばなれのした、蜃気楼のようにほんの一時空中に描き出された、眼をしばだたくと消え失せてしまう世界

が現出されているのであってこの世界こそが生母を出現させるに最も適当な世界であったのである。春という季節、そして夕暮れ、月の光、満開の桜の花びら、これ等に払われた谷崎の配慮は唯ひとつ、それは実に光線であった。『陰翳礼讃』の著者の欲する、あらわすより隠すことの魅力を發揮する、「不思議な、特殊な明るさ」であった。その中に姿をあらわす、生母は更に「年老いた僧がしばしば防寒用に用いる白い絹の帽子を、頭からすっぽり被_なつて」いたのである。

——……と、尼はしづかに花の下を去って、その崖を下り始めた。そして清水のほとりに来て身をかがめながら、手をさしのべて山吹の枝を折ろうとするのであった。

ここに突然のように山吹の花が出て来る。皓_{しろ}い山桜を透して来る夕月のおぼろげな光、その下に絹の白い防寒頭巾

がある。何もかにもがおほめく白い色の中に、注意色ではあるが刺戟的でない黄色い花の色。このあとすぐに又山吹の語が出て来る。

——尼は手折った山吹を持って立ち上り、……

作者谷崎はこの山吹を何の為に出して来たのであろうか。やや強引な私見は、このあとの「円光」のところで述べたい。

作者の巧みに巧み込んだ、そして細心の注意を払って来た生母登場の舞台はここにほほと思われ、あとはまことに劇的にストーリーが展開する。ここで読者にすぐ感じられることは文章の長さである。悠然と落着き払ってそして綿々と述べられて来た文章は息の長いものであった。それがここに来て短くなる。

——滋幹は何かの力で背後から突かれたように尼の方へのめり出ていた。

と言う風な切羽つまった感情の湧出における主人公滋幹の呼吸の乱れと喘ぎに歩調を合わせるように叙される。この辺りの作者の文章は誠に見事なものである。そしてフィナーレがむかえられる。

——「お母さま」

と、滋幹はもう一度云った。彼は地上に跪いて、下から母を見上げ、彼女の膝に靠れかかるような姿勢を取った。

という描写は、滋幹に投影された作者谷崎の美女に対する拝跪趣味の端的な現れである。

——一瞬にして彼は自分が六七歳の幼童になったような気がした。

は、彼のマザーコンプレックスの有り様を伝えて余蘊がない。それにしても最後に描かれた、生母の姿に注意したい。

三、生母の姿

——白い帽子の奥にある母の顔は、花を透かして来る月あかりに暈ぼかされて、可愛く、小さく、円光を背負っているように見えた。

これが四十年来滋幹が胸奥に秘めつづけて来た母の姿である。そしてその母の姿の表現のすべてである。これでは何も描かれていない。その通りである。作者は「可愛い」という主観的な語をひとつ洩もらただけで、他の一切の描写を避けた。それは恰も『源氏物語』の「雲隠の巻」の如きものであろう。そして筆者にはこの「可愛い」という表現が普通、子供が母親に対してのものとは思えない。それは多分に筆者の思い過ぎに違いないと思うのだが、矢張り異性に対する感覚ではないかと思える。そして、「円光を背負う」というのは、勿論仏・菩薩の頭の後方から射す光の輪であり、母がこの時人間離れた仏菩薩の如く神々しく思われたというのであるが、さきに記した山吹の事が思われる。これも筆者の勝手な空想ではあるが、観世音菩薩の左手に持たれる一茎の花になぞらえての事ではないか。観音の御手には、周知の如く、柳の枝、蓮の花などがしばしば見られる。それと、最後に「母の袂で涙を」押し拭うという箇所であるが、美女の「袂」でというのは鏡花の趣味などにも通うもので甘美な芳香のただようところである。

むすび

美婦美女を描いて他の追従を許さない近代作家は日本にも多い。例えば、紅葉、鏡花、荷風、潤一郎、川端、丹羽の如きである。この中で、本稿では、谷崎のマザーコンプレックスに中心を置いて、作品『滋幹の母』の表現につい

て具体的にその現れを見て来た。同様の見方をして来て、矢張り最も異様に感じられるのは、川端と丹羽であろうと思われる。周知の如く川端康成は二歳で父を亡い、三歳で母を亡っている。彼には両親の面影が残されていない。しかも川端の作品を見ると、その美女に対する追求ぶりに於て、純粹、純潔、なるものに奇せる渴仰の激しさは類を絶している。ここに川端のマザーコンプレックスを云々することは大変に異常なことのようにあるが、必らずしもそうとは決めつけられまいと筆者は考える。それともうひとつは丹羽の場合であろう。丹羽文雄はその処女作『鮎』に於て、モデルにとつた生母の実際の年齢を数年繰り下げて、若々しい煽情的な婀娜な母に描いている。その母が七十才まで生存し、彼に『嫌やがらせの年齢』を書かせた。若く美しい生母と別れて、胸の奥深く生母の面影を秘めているという、マザーコンプレックスの普通のあり方を思うとき、このことも又正に複雑なことのようにである。日本の近代文学に於てこの問題は実に大きい。本稿は谷崎のそれについての一端を述べたものである。